

## 【 付 記 】

本稿公表後、以下のことに気づきましたので、若干の補足をいたします。本稿「はじめに」の最後の段落で、“隠れ”と“隠し”の語の理解について、“隠れ”が能動的であるのに対して“隠し”は慣習的である、と説明しましたが、前稿「近世秩序における「邪」の揺らぎ—“隠し／隠れ念仏”と「切支丹」—」（島菌進ほか編『シリーズ日本人と宗教—近世から近代へ6 他者と境界—』春秋社、2015年）では、“隠れ”が受動的であるのに対して“隠し”は能動的である、と説明しています。

正確には、浄土真宗が禁止されていた鹿児島藩・人吉藩領では、禁制政策が原因で“隠れ”なければならなかったという意味で“隠れ念仏”は受動的であり、浄土真宗が禁止されていなかった地域の“隠し念仏”は、本山から異端視されたにも拘わらず意図的に活動を実践していたという意味で能動的であるという評価がある、と説明すべきだったかもしれません。ただし、その一方で、浄土真宗の禁制政策に対する能動的な“隠れ念仏”に対して、浄土真宗の容認地域における慣習的な“隠し念仏”、との理解もあり得ると考えます。

正直なところ、従来の“隠れ”と“隠し”という語の筆者の理解は混乱しており、現段階では十分な整理ができておりません。両者の語義について、理解があやふやなまま議論を始めていることを恥じ入りますが、“隠れ”も“隠し”も近世の同時代に使用された語ではないことは確かです。前稿・本稿で明らかにしたことは、それらの宗教活動の実践者はいずれも能動的に活動していたということであり、“隠れ”と“隠し”に分断して理解すべきではないという筆者の立場は一貫しています。したがって、”隠れ””隠し”の語の理解がどのように変化しても、論旨全体に影響はございません。従来の両者の語義については、近い将来、改めて整理したいと思います。

大橋 幸泰